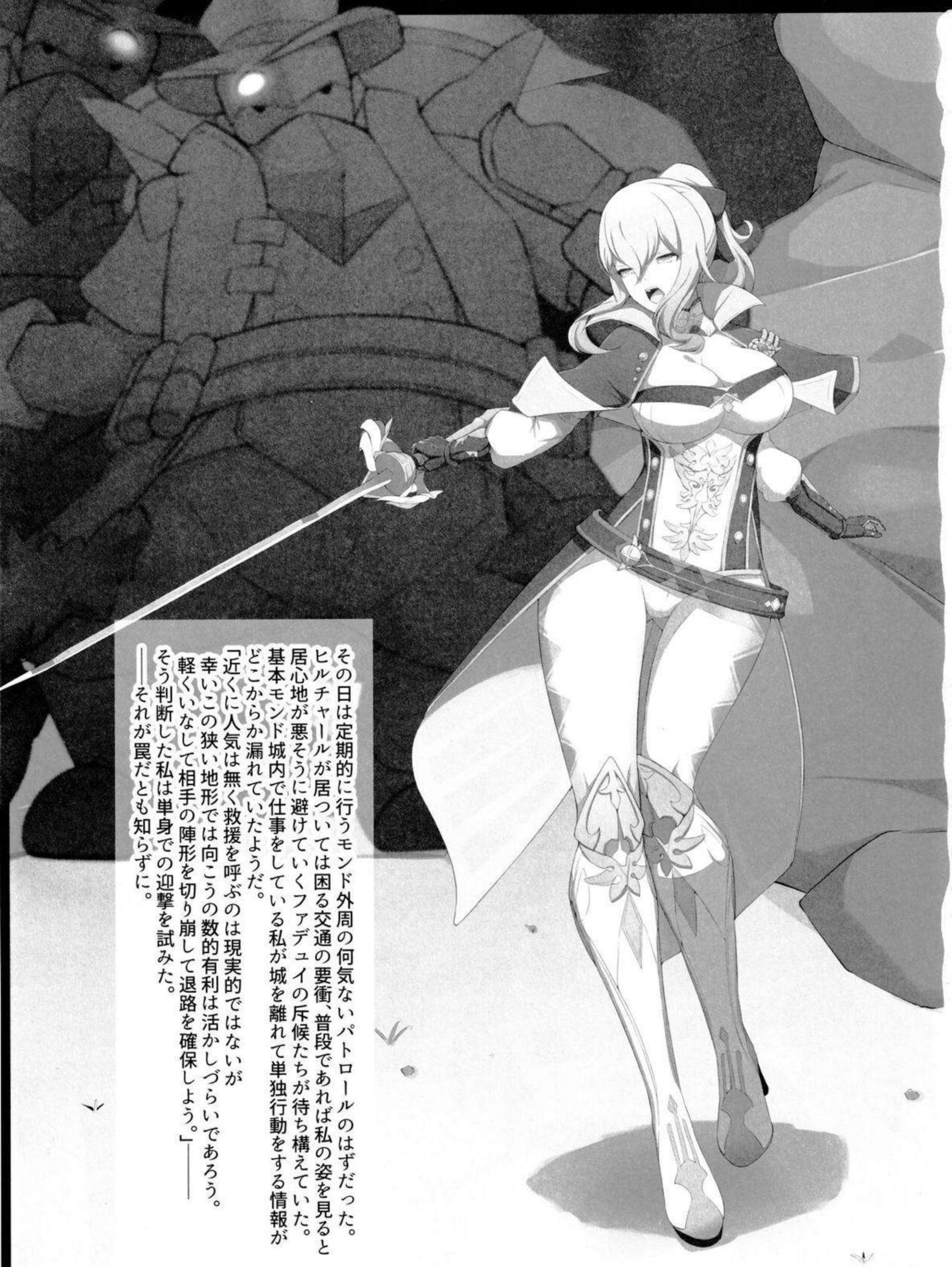
DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止
吹き荒ぶ
冬風



その日は定期的に行うモンド外周の何気ないパトロールのはずだった。
ヒルチャールが居ついては困る交通の要衝、普段であれば私の姿を見ると居心地が悪そうに避けていくファデュイの斥候たちが待ち構えていた。
基本モンド城内で仕事をしている私が城を離れて単独行動をする情報がどこからか漏れていたようだ。
「近くに人気は無く救援を呼ぶのは現実的ではないが
幸いこの狭い地形では向こうの数的有利は活かしづらいであろう。
軽くいなして相手の陣形を切り崩して退路を確保しよう。」――
そう判断した私は単身での迎撃を試みた。
――それが罠だとも知らずに。

「ファデュイの斥候などどれだけ束になろうと相手ではない」
そういった慢心が心のどこかにあったのかもしれない。
見慣れたスネージナヤの兵隊服や蛍術師の中に
見慣れない長躯の術師が居たことにもっと警戒するべきだった。
それが大仰な仕草をとり、瞬間足元で何かが閃いたと
気付いた時にはもう手遅れであった。

ヒュンッ
ヒュッ
コォォォォ…
しまっ…！
ズッ
バッ

自らの迂闊さを責める言葉が口を衝いて出ると同時に
無数の水弾が私の体を殴打し、間髪入れず雷撃が降り注いだ。
風圧剣で敵の前衛を吹き飛ばそうと踏み込んだ先に
予め術式が仕込まれていたと気が付いたのは
水弾と雷撃から解放され地面に崩れ落ちた後だった。
私が単独行動をする情報を元に待ち伏せしていたのであれば
罠を警戒して然るべきであった。自責の念が脳内を駆け巡るが
感電しきった体は言うことを聞かずただ痙攣するだけ。
「捕獲完了…」と呟く長躯の術師をはじめとした
ファデュイの斥候の嘲笑に囲まれながら、私は意識を手放した。
ぶるん
ビリッ
ガッッッ！
ドゴッ
バチッ
ミシィッ
バチッ
ビクッ
バチッ
あ…
かは…っ
つん
つん
ピク
ピク
ピク
ガク
ガク
ビク
ビク

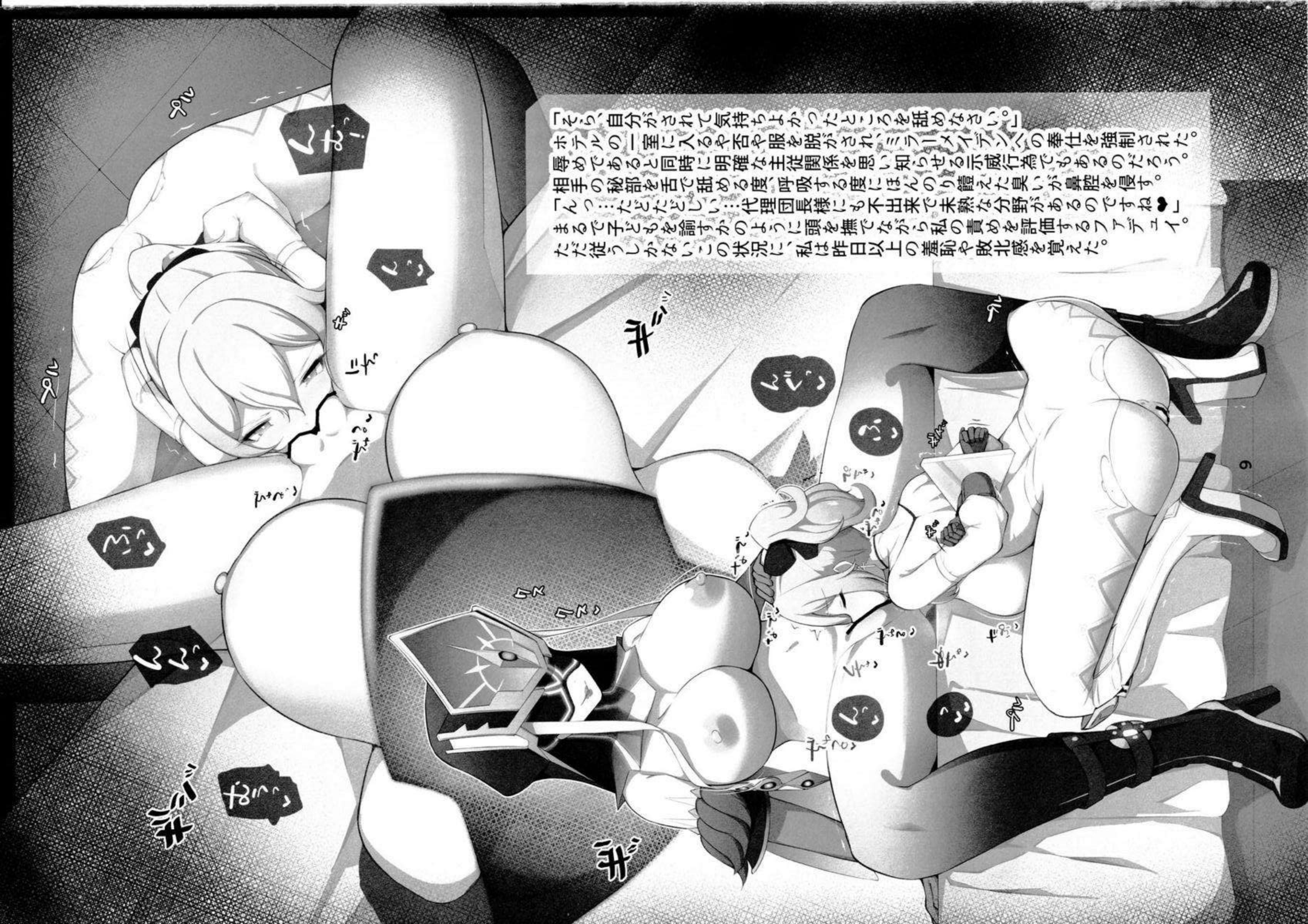
耳元では煽りを交えた甘い言葉を囁かれ、
方々からは野太い声で卑猥な野次が投げかけられる。
どうやら私は捕獲対象であると同時に
この作戦の功労者へのご褒美でもあるらしい。
剣戟であれば簡単に切り伏せられる雑兵相手に
痴態を晒しながら嬲られ、詰られ、辱められている。
その現状を恥じて打開の案を模索するも
私に出来たことは情けなく身悶えすることのみだった。
意識を取り戻し目を開けた先は闇だった。
何かで視界を遮られた状態で長躯の斥候、
ミラーメイデンの膝の上で股を広げさせられ、
秘部を蛍術師に舐められる屈辱的な体勢を
とらされている現状を把握するまでに
そう時間を要しなかった。しかし、感電して
満身創痍の上、四肢を拘束され視界も奪われた
状態では脱出も抵抗も不可能であった。

その度に外野を取り囲んでいた斥候に撮影され
私の痴態を収めた写真はゆうに100枚を超えるだろう。
「何事も無く、パトロールを終えたフリをして帰還しろ。また連絡する。」
夜が更けるまで辱めを受けた後そう言い残してファデュイは撤収し、
私はモンド城の近くに捨て置かれるようにして解放された。
敵の命令に従うなど甚だ業腹ではあるが今日の出来事を誰かに
報告できる訳も無く、そもそも半裸姿の今誰とも接触できない。
私は命令に従う形で人目を避けて帰宅し、悪夢のような一日を終えた。

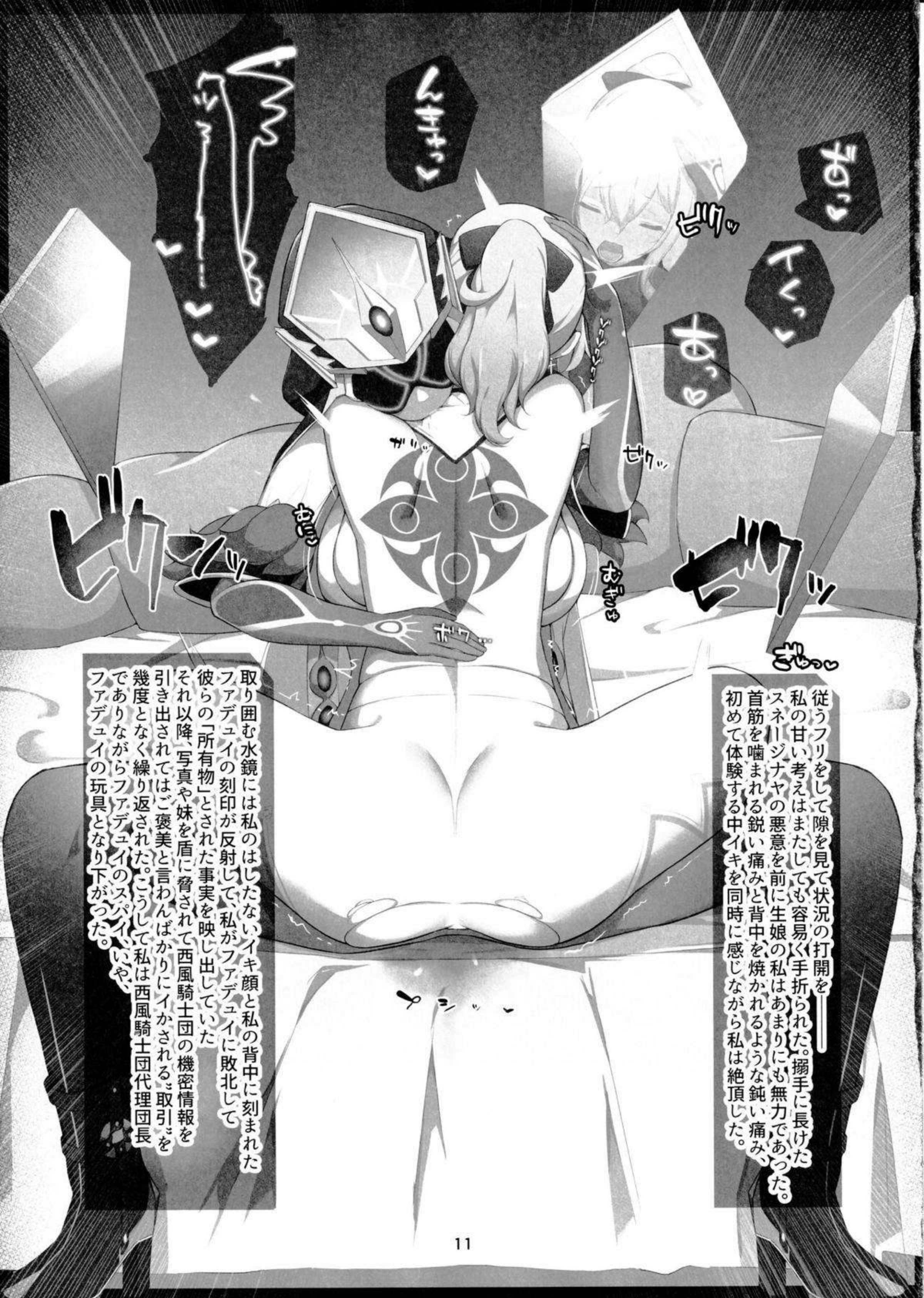
虜囚への尋問の手口の一つとしてそうした訓練を受けているのだろう。
ファデュイの指と舌は的確に自分でさえ知らない私の弱いところを
探し当てて責め続けた。自分の指では届かない深いところや
自慰では同時に触れないところ、触ろうと思ったことすら無いところ…
あらゆる角度から叩きこまれる許容量を遥かに超える性的快感を前に
私は為す術無く何度も何度も無様にイかされ続けた。

それ以降、毎夜のようにゲーテホテルに呼ばれてはあの日の"続き"をさせられた。
「召喚の求めに応じなければあの日の写真をモンドにばら撒く。」
「貴殿の妹にも同じことをする。」
そう脅された私には奴らの要求を呑む以外の選択肢は無かった。

長らくファデュイによって貸し切られたホテル内はモンド城内でありながら
ファデュイの根城と化しており、館内に私の味方は存在しなかった。


「そら、自分がされて気持ちよかったところを舐めなさい。」
ホテルの一室に入るや否や服を脱がされ、ミラーメイデンへの奉仕を強制された。
辱めであると同時に明確な主従関係を思い知らせる示威行為でもあるのだろう。
相手の秘部を舌で舐める度、呼吸する度にほんのり鼻腔を侵す。
「んっ…だどだどしい…代理団長様にも不出来で未熟な分野があるのですね♥」
まるで子どもを諭すかのように頭を撫でながら私の責めを評価するアデュイ。
ただ従うしかないこの状況に、私は昨日以上の羞恥や敗北感を覚えた。
ペロ
ペロ
ペロ

ひとしきり前戯を強要された後、ミラーメイデンは男性器を模した器具を身に着け、私の濡れそぼった秘部に挿入してみせた。まるで恋人同士が愛を貪りあうかのような体位で拘束され、抵抗の意志を示そうとする身動ぎはかえって膣内に挿入れられた異物の存在感をより強調してしまい、自分の首を絞める結果となった。
いつかは愛する人とするのだろうと夢見ていた初体験が敵に、それも玩具で雑に奪われたなど考えたくなかった。だがそれ以上に、これが愛のない行為であると頭では理解しているのに、耳元で甘い言葉を囁かれる度、無理やり舌を絡ませられて膣内を突かれる度に、思考が蕩けるような快感を覚えてしまっている事実を認めたくなかった。
ゼッ
んっ
んっ
ゼクッ
んっ
ふっ
んむっ
ぐちゅ
ぢゅる
ぢゅる
ぶにん
どクッ
ぎゅむ
ゴッン
ミチッ
ミチッ
どク
ぎゅっ
パチュッ
パンッ
パンッ
ギシッ
ギシッ


ん♡ぎょっ
ぎゅっ
ぎゅっ
ビクンッ
ビクッ
ビクッ
ボク…
ゼクッ
ゼクッ
ぎゅっ♡
ぎゅっ♡
ぎゅっ♡

ある日、いつものように弄ばれている最中突然部屋のドアが開き
また別のミラーメイデンが半裸のエウルアを引き連れて現れた。
どうやら私から引き出した情報を元にして単独作戦中のエウルアを
私と同じように捕縛、拠点で軽く辱めた後、この恰好のまま
モンドの街中を練り歩いてきたらしい。

「いきなり現れた半裸の変態に目を覆う者もいましたが、
好奇の目やざまあみろと言わんばかりの蔑みの視線も
少なくありませんでした。罪人と自称するだけはありますね❤」

エウルアは強い口調で罵倒していたものの、ミラーメイデンは意にも介さず微笑みながらその口を塞ぐようにキスをした。数分、あるいは数十分のようにも感じる長い長いキス責め。初めは声にならない声を上げながら抵抗していたエウルアだが、次第にその声のトーンは大人しくなっていき、ほどなくして一際大きな嬌声とともにビクンッと体を跳ねさせた。傍目から見ても分かる絶頂の後、バチッと音が鳴り、エウルアの背中にもファデュイの刻印が施された。ミラーメイデンの舌技から解放されたエウルアはただ惚けた表情で呼吸をするのが精一杯のようで、いつものように恨みだ何だと言う事は無かった。

その出自と性格からいつも憎まれ口をたたくあのエウルアが旧貴族の作法をかなぐり捨てて懇願してイキ顔を晒している。にわかには信じがたい光景であった。

ミラーメイデンはその哀願を意に介さず責めを加速させ続け、程無くして一際大きな嬌声とともにエウルアは潮を吹いて絶頂し、その愛液が私に降り注いだ。

私の前で絶頂させられた恥辱、手練手管の責めによる快感が綯い交ぜになったその表情はもはや浪花騎士ではなくただのメスの顔であった。私に続いてモンドの騎士がまた一人ファデュイの雑兵に完全敗北した瞬間だった。

その日以降、毎夜の調教尋問の場にエウルアも加わることとなった。

後ろからミラーメイデンに膣奥を突かれ、開発された性感帯をこれでもかと執拗に刺激されながら、目の前で同じことをされているエウルアと互いに体重を預け合って舌を絡ませるよう強要される。前後を柔らかい女体に挟まれて五感全てが淫靡で退廃的な要素に支配された状況に、思考の全てがぼやけるような感覚に陥る。

滅多にモンドに帰ってくることが無い遊撃小隊隊長が毎晩城内で目撃されるリスクがあるのは好ましくないという判断から、エウルアは夜だけの私とは異なりホテル内に軟禁された。遊撃小隊には「小隊長は暫く単独作戦に従事する。」と代理団長名義で言伝じてあるため、エウルアの不在を怪しむ者は誰も居ないだろう。助けを期待できない状況と昼夜を問わない調教・凌辱からか、エウルアは日を重ねるごとに従順になっていった。

2人ともまだ騎士としての矜持までは手放してはいないが、
調教・開発されきった体は既に敵の手に堕ちたも同然で
尻を叩かれながら膣奥を突かれては無様にイかされ続けた。
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ

まるで恋仲との性交であるかのように手を固く握られながら、
支配関係を思い知らしめるかのように首を強く絞められながら、
私たちは同時に絶頂し、意識を手放した。
ぴゅ
ぴゅ
ぎゅ
たぷっ
ぎゅっ
ぎゅっ
ぎゅ

「…ではまた、いつものお時間にお越しください、ジン代理団長❤」

日付が変わる頃になるとその日の調教成果の記録、撮影を経て調教は中断。私は一旦解放される。体の疼きを抑え込みながら日中騎士団業務にあたり夜には何度も気を失うほど弄ばれる。あれ以降、そんな生活が何日も続いている。

連日連夜の調教で私たち2人が知りうる西風騎士団の機密情報は全て引き出されてしまったがそれでもこの日々が終わることはなかった。もはやファデュイにとって私たち2人は重要な情報源ではなく、ただの都合のいい少し高級な情婦のようなものなのだろう。この現状を恥じながらも打開する方法を見いだせず、また明日も情けない声で喘ぐのだろう。

終

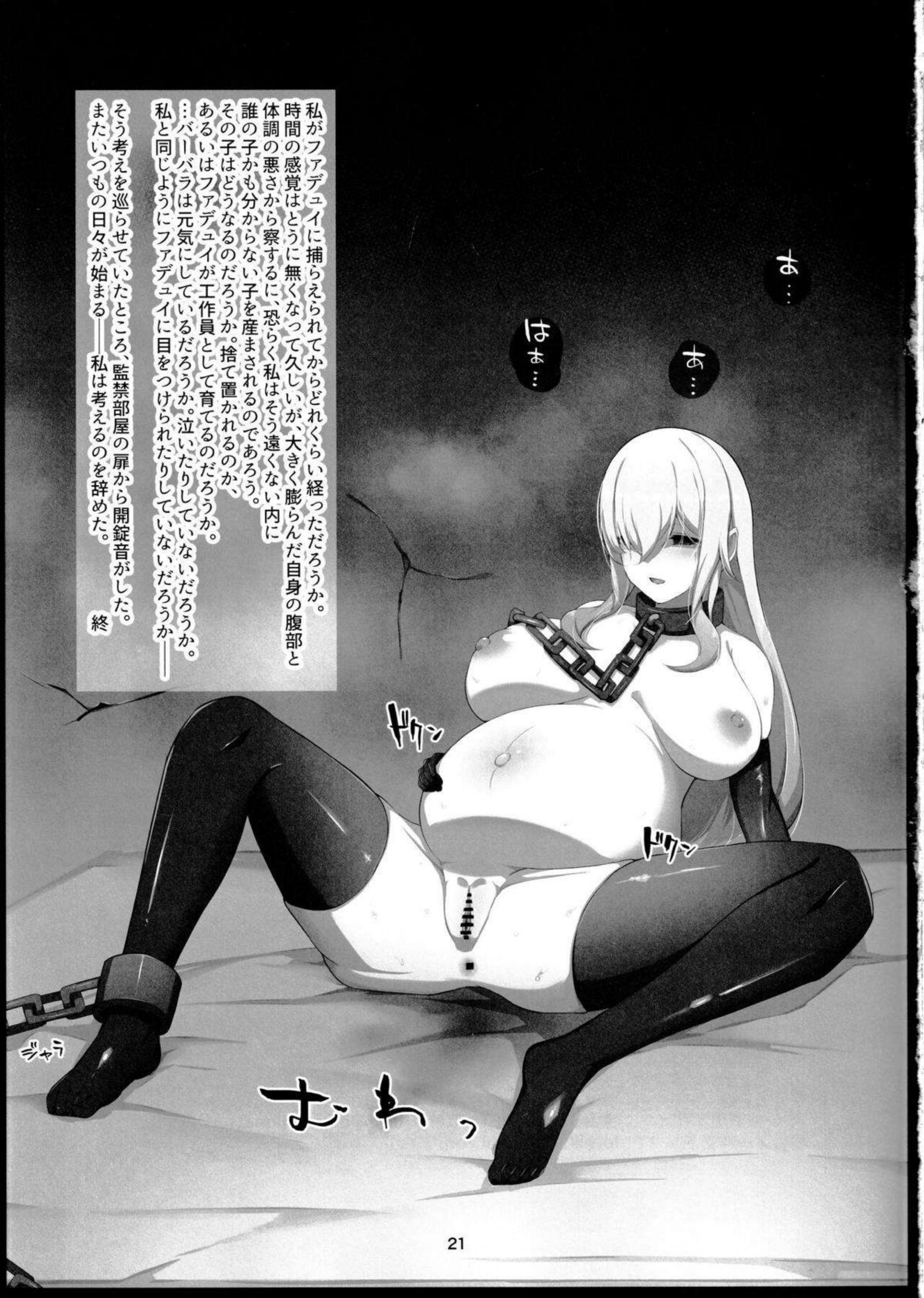
【おまけ】
最初にジンの情報を流したのは
スメール旅行時にファデュイに
手籠めにされたリサという設定でした。

【おまけ　ファデュイ先遣隊に敗北】
私は気を失っている間に何処かに移送・監禁され
凌辱の限りを尽くされた。神の目の無い私など
ただのメスだとでも言わんばかりに
屈強なファデュイ兵に代わる代わる犯され続けた。
ファデュイ曰く、モンドでは行方不明となった私の捜索が
されているものの、ファデュイの息がかかった者が
その全権を担っているためこの場所が見つかることは
絶対に無いらしい。それを裏付けるかのような終わりの
見えない凌辱の日々は私の心をゆっくりと蝕んでいった。

私がファデュイに捕らえられてからどれくらい経っただろうか。
時間の感覚はとうに無くなって久しいが、大きく膨らんだ自身の腹部と
体調の悪さから察するに、恐らく私はそう遠くない内に
誰の子かも分からない子を産まされるのであろう。
その子はどうなるのだろうか。捨て置かれるのか、
あるいはファデュイが工作員として育てるのだろうか。
…バーバラは元気にしているだろうか。泣いたりしていないだろうか。
私と同じようにファデュイに目をつけられたりしていないだろうか――

そう考えを巡らせていたところ、監禁部屋の扉から開錠音がした。
またいつもの日々が始まる――私は考えるのを辞めた。

終



あとがき

拙作ご購入いただきありがとうございます。チャパ仮です。
色々と悩み過ぎて想定の倍以上時間がかかってしまい
そのせいで最初と最後で胸のサイズが違い過ぎたりもしてますが
「買ってよかったな」と思ってもらえたら嬉しいです。
それではまた、次回作があれば。

※拙作の違法アップロードや無断転載を禁止しますが、万が一そのような方法で見た方は
原神, 崩壊3rd, 崩壊スターレイルなどのHoYoverseのコンテンツに課金して
本家に利益を還元してください。

奥付

誌名　：吹き荒ぶ冬風
印刷所：みかんの樹 様
発行日：2023年8月13日

サークル名　　：ニンゲンフムキ
著者名　　：チャパ仮（Twitter, X ID：@1_tri_pic）
表紙・裏表紙デザイン：曳山まつり 様（Twitter,X ID：@hikiyamamatsuri）
著者メールアドレス　：forhikari@gmail.com

2023.8.13

ニンゲンフムキ